物と心

山田次郎

これは昨年十月號所載の拙稿を承けるが、これだけでも解る積りである。不手際乍ら正直には考へてみた積りで初學の方々の御參考になれば幸ひである。尙、「有と知」として世界と人生とを或る形式的一貫性を以て展望しようと考へた初めの意圖は、以下題目は區切りながらに、又問題の要求によつては部分的な深入りと逡廻りを辭せずに、貫徹したい考へである。――それによつて立場も否應なしに自分を裁判することになるであらう。

「意識」そのものの定位はいかに考へられるか。私の身體の內外に夫々の配置を受べく上來考へられて來た感覺や感情は、實はそれらが性質的存在的に意識の對象的內容たり得る限りに於いてその事が可能であつた。その意味に於いては、それらを意識する意識そのものは、それら存在的內容とは異つて、あくまで他を位置附けるものであつて自ら位置附けられるものではないといふ風に考へられる。成程或る場合「感じる」とか「考へる」とか云ふことが私の身體の特に心臟部とか頭部とかに於いて、云ひ換へればそれら空間的位置に限定せらるべく、或る性質的生內容の體驗せられることであることは否定できない。併し乍らそれは唯そのやうな性質的內容がその所謂感じや考へに際して省みて同時的（嚴密には直接繼時的）に捉え得られるといふ事實たるに止まり、その性質的內容が直ちにその感じや考へそのものではなく却つて現にその內容を省みそれの身體的配置を感じてゐるものこそ眞の意識そのものといふ

べきであつて、從つて右の定位を以てそのまま意識の定位とは考へることができない。凡そものについて定位が考へられるのはそれが反省的に捉え得られることを條件とすると考へられる限り、反省そのものとしての意識の立場は當然あらゆる定位を超越すると云はねばならない。我々は上に性質的內容の位置附けに關して――その所謂位置附けなるものが、實はその性質的內容に關し行動的に實現せらるべき或る可能的體驗の法則的豫期に外ならぬのであつて、決して現前單獨の性質的內容そのものが「外に」或は「內に」あるといふことではない――といふことを云つた。卽ち空間的位置といふものはその意味に於いて現實的並びに想像的な性質的體驗に關する或る意味的な關係の意識に於いてはじめて成り立つのであつて、その性質的關係項や關係そのものの端的な「ある」に外ならぬ意識そのものについてそれの空間的位置を云ふことは本來不可能でもあり又無意味でもなければならぬのである。――同樣な意味に於いてそれは時間性をも超えるといふことが出來、空間的位置とひとしくあらゆる時間的推移がそれに於いて「ある」。既に遠い昔からさう考へた者のゐたやうに、それは凡そ老ゆることの無いものであるといふことができる。たとへ目はかすみ耳は遠くなるにせよ、そのやうな身體的の衰へをそれとして確然と判斷意識に織り込むこと、壯時に於けるそれらの鋭敏さや明晰さに關すると少しも誤る所はない。意識の最直接相は斷定（自同意識）であり、疑ひに際しては疑はしさは確信され蓋然判斷の底には蓋然性に關する斷定がなければならぬ（斷定であり確信であればこそ、それは直ちに意志的に動きうる）。而してその「ある」乃至「である」の斷定意識そのものは生を通じて終始變らずあくまで新鮮であるといふことができる。赤を映し靑を映す鏡面の自身色にかかはらぬが如くである。それは私の身體的破滅に當つてはその破滅をも、可能的な苦痛動顚乃至溷濁を含めて、靜澄に記銘するであらう。而もかくすべてを映

し取るもの自身の消滅に至つてはそれの映し取られるといふことは明白な矛盾であつて、現實的に――生の想像的乃至推論的遊離態に於いてでなく――は、起り得ないのである。

併し右のやうに考へてみても一應その明白な「記述」的事實たることを否定できない乍らに何かそのままには全くは承服し切れないものの感ぜられるのは何故であらうか。云ひ換へるならば私はやはり意識の定位を考へようとする――即ち、意識がその變様を通ずる形式的同一性に於いて可能性を含みつつ實體的に考へられたものとしての所謂「心」をば身體といふ一種の空間的物的存在の中に置かうとする――自然の傾向を禁じ得ない。例へば現に私の意識生活は私の身體の移動と共に移動するではないかといふ風に考へられる。私はここに思ひ又かしこに思ふ――このことは一體何を意味するか。考へてみるに、それは畢竟私の意識内容が特に「外界」的なそれに關する所謂配置の變化に關して常に身體中心的であるといふこと、そのやうな「環境」的内容の比較的顯著な變化の反面に所謂有機感覺とか運動感覺とかといふ上述の意味に於いて私の身體内部に定位せられる内容が比較的に恒常性を保つといふこと、これらの事柄を意味するに過ぎないと思はれる。然る限りそれはあくまでやはり意識の内容に關してゐるのであつて（意識そのものに關してゐるのでなく）、そのやうな内容的事態を體驗し反省しその間の法則性に於いてそれを更に未來に期待しつつその事に即して私の身體の又それに準じて所謂意識の移動といふことを考へてゐるものこそ實は眞の意識に外ならぬといふ上述の考へ方は依然としてこの場合にも適用されるべきであると思はれるのに、それにも拘らず右の事態に於いてあくまでやはり所謂意識の定位といふことが考へられようとするのは何故であらうか。

その理由といふのは畢竟かうであると思はれる。即ち、上述の意味に於いて意識に位置無しと考へられる時、そこ

に所謂意識が純形式的にあくまで所謂映し取るものとして全く受容的觀照的に考へられてゐることが明らかであつて、而も意識は具體的に「意」としての一面を缺き得ないのであり、單純な感覺と考へられる如きものにも既に何らかの意欲的傾動は內含され例へば痛苦の感覺の如きについてみればその事は一層明瞭であつて、痛みを痛みとして感知することとその痛みから解放されようとする廣義の行動的な營みとは少くとも差當り切り離すことができないと考へられる。勿論この場合にもそのやうな意欲的な働きそのものを自身あくまで冷徹に映し見てゐるものがあるとも考へられることは正に上述の如くであるに違ひないけれども、その分離には云はば何か「作爲」が感ぜられる。云ひ換へるならば、そのやうな觀照者が確かに意識そのものでありつまり私自身であると云ひ得ると同じく——否、自然的に生の重心が寧ろ常に意欲的一面にある意味に於いてはそれに優つてさへ——かの動き働く當のものこそまさしく私自身である。而して若しかういふ自然的な意欲的行動的立場に立つて考へるとするならば、所謂關心の所在は云ふまでもなく專ら意識の內容にあり、それの出現や經過の規制にある。而も意識をそのやうに（特に感覺的內容に關し）規制するに當つては結局空間的物的世界の或る一部分としての私の身體といふものをば、上の例の場合で云へばそれを移動させる——卽ち異つた外物を逐次それに接觸させる——といふ風に適宜行動的に規定すれば足る（この事は窮極する所私の大腦皮質と呼ばれる身體部分について所謂神經過程に於ける或る變化の惹起といふことに歸着するのであるが）。云ひ換へれば意識を內容的に規定しようとするに際し、意欲的な働きかけの差當つて效果を現はすべき所としての當面の對象は、結局身體に外ならぬ。而も他方日常の經驗に於いて、所謂因果的な變化の相應性が互に直接的であり精密であればある程、それら相關者は事實上空間的にも亦互に相接近するのが常である。ここに於いてか所

謂意識については、實はそれの內容に關する意欲的規定の當面の對象が結局身體である――つまり意識を內容的に規定するには結局身體を規定すればよい、或は身體を先づ規定しない限り意識を內容的に規定することはできない――と考へられる事實から、變化の原因的先行者のある所卽ちその直接の結果的繼起者のある所といふ習慣的な考へ方に從つて、その身體のある同じ場所にそれの空間的位置なるものが考へられようとするのであると思はれる。

事情右の如くである限り、この場合の所謂定位が決して本來の、並置的な意味に於ける空間的限定を意味するのでないことが明白である。卽ちそこには意識の內容的變化に關する原因的先行者と見られた身體といふ一種の空間的物的存在の位置に準じて、全く形式的に考へられた意識そのものについての位置なるものまでもが、唯漠然と深くその仔細なあり方については考へられることなく、考へられてゐるのであるに過ぎない。それであるから身體の內とはいふものの意識そのものについての所謂位置をば――例へば或る赤の感覺內容が外界的に花のある場所にあるとされ又或る痛みの如きが身體の或る箇所に位置附けられると同じ意味に於いて――空間的に指摘しようと試みても、それは明らかに不可能なのである。花の赤や身體部分の痛みに關する定位は旣に述べた如く、それら感覺內容の廣義の强度の消長が、例へば目をそれに近づけるとか手を以て觸れてみるとかいふ如き何らかの行動的體驗との相關性に於いて經驗せられ、その相關的事態が眞の具體的意味として含まれつつ所謂刺戟の源泉がそれらの場所にあると考へられることに外ならぬのであり、廣く思考や意志の純作用性の一面として同時に右の如き感覺的性質の感知そのものでもあるところの形式的な意識そのものについて今我々の考へてゐる定位は、實は意識の內容的な規定に當つて意志的作爲の差當りそれに向ふべく變化の直接的先行者と考へられてゐるものの位置に外ならない（先づ包括的に身體が考へら

れ、やがて經驗の生理學的乃至解剖學的な精密化と共に身體部分の中所謂神經系統特に大腦皮質なるものにまでその範圍が限定されて來ることとなる)。卽ち何れにしても空間的位置といふものは、性質的に存在的な內容に關して行動的に實現せらるべき或る意味的關係の含蓄に卽しそれに於いてはじめて成り立つて居り、單獨に項的な性質的內容そのものやその間の關係そのものの端的な「ある」についてその空間的位置を云ふことは明らかに不可能なのである。空間性がそれによつて成り立つてゐるものに空間性は無いのが當然である。

併し乍ら尙考へてみるのに、意識が身體的に規定せられるのは決して右の如く單に內容的たるに止まるのでなく、實はその形式的な「ある」自體にも亦關してゐるのではないか。例へば身體を破壞すれば意識そのものとてもやはり無くなつて了ふのではないか。――この疑問には旣に一應答へられた。身體と共に消滅する(と考へられる)のはあくまで唯意識の想像的遊離態――その限りに於いてやはりあくまで意識の內容――であつて、現に爾考へる――純形式的な――現實的意識そのものでは決してない。――この意味に於ける眞の現實性が一たびかの意味的想像態の中に全く見失はれて了ふならば、そこには意識の空間的定位といふことがやがてそれに外ならぬところの世界の決定論的唯物化といふことがおのづから必至となると云つてよいことは明白である。而もその事の根本的な可能性は旣に形式的に自覺に於いて――「ある」として凡そ「確信」の原理であるところの自覺に於いて――そこに知られるものが知るものと同一であるとせられる所に實は暗に含まれてゐるのに外ならぬのである。而も又、その同じ自覺に於いて知られるものが確かに知るものであるにも拘らずやはり知られるものは畢に知るものではない、さうでなければ抑、知ると云ひ自覺するといふことも成り立たぬといふことが亦絕對の事實である。――卽ち實はここにこそ凡そ「立場」と

いふものの眞の究極の分岐點、分岐點の分岐點があるのであり、畢竟事態は一にかかつて抑〻自由といふものが、實はその本質を自由性の意識の卽ちその存在に外ならぬ點にもつものであることを行爲に卽して實證せられるか、否か（知的反省的にその事の疑はれ、更には徹底して否定せられるか）といふ點に存すると云つてよいのである。而も生は具體的に行爲であると共に知であり、自然的には從つて右の二面の混合なる一種の曖昧がそこに支配してゐるのであるが、生の徹底的自覺たるべきものとしての哲學に於いては、當然右の二面の確然たる所謂二律背反的兩立性が、あくまでその必然性の納得に於いて、認められなければならぬ。而も實際上哲學が、生の行爲的道德的一面をも當然含まねばならぬものとして、科學的に（知的反省の一面に偏して）自然的な世界觀のおのづから採らうとする唯物的決定論的傾向に對しては（その傾向も科學の近時に於ける哲學化的徹底に於いては當然なる如く却つてそれ自身その反對に轉化して來たと云つてよい事情は上述の通りであるが）、既に哲學の歷史の上にもそれの主流といふべきものに就いて示されてゐる如く、おのづから所謂觀念論的傾向の一面へその重點を移さうとするといふことも亦止むを得ない理由をもつと云ふべきなのである。

ところで我々の今あらためて吟味しなければならぬのは、意識の定位に關する如上の考への中、所謂心と身體との間に於ける一種の因果關係として考へられてゐるものの眞相についてである。一方に私は意志的に身體を動かしそれを通じて外界に働きかける、云ひ換へれば所謂心的に非空間的な意志の働きを原因として身體並びにその外界に於ける空間的に物的な何らかの變化を結果する、と考へられると共に、他方外界的な影響が所謂刺戟として身體的狀態の

變化を介して結局意識內容の變化となる、卽ち前と反對に或る空間的物的事情が原因となつて非空間的な意識界の變化が結果的に將來される、といふ風に考へられる。日常的に少しも疑はれて居らぬこのやうな時間的規制關係の眞相、その眞の具體的事情はいかなるものであるか、これを考へてみなければならぬ。

元來刺戟といふ言葉がそこから出たであらう種類の簡單な例から始めよう。私は手の皮膚をペン先で突き或る觸の感覺を得る。この事柄を「現象論」的に仔細に追究してみるとどういふことになるか。先づ私は現にペン軸を支へてゐる私の右手に關して、或る視覺的觸覺的な現實體驗をもつてゐる。而してその現實體驗は、それが若し眞にその單なる現前態に卽してのみ見られるとするならば、上述した所によつて明らかなやうにそれは差當り唯非空間的に所謂心的である外ないのであるけれども、事實上それはその單なる現前態以上に尙無數の可能的體驗（それを更に遠ざけ或は近づけて見るとか他方の手で以てそこに觸れてみるとかといふ如き）をそれに關して意味的に堅く拘束して居り、その事に卽してそれは明らかに一つの外界的な物的事象（右手によつて或る位置に支へられたペン）であるのである。そこで更に私は、その現在の位置とは聊か異つた他の位置（左手の皮膚に接するといふ位置）に支へられたペン先と、ペン先をしてその位置を取らしむべき右手の運動といふ或る可能的な視覺的觸覺的運動感覺的內容をば——先づ豫めそれを輪廓的に想像しつつその中へ云はば生を以て躍入すると云ふべき或る獨特の體驗に於いて——所謂意志するのである（それを例へば注意的專念と云つてみても、注意といふこと自體すでに意志的に發動された一つのあらはれに外ならず、一般に心理學的存在的內容には還元し盡せない一種獨特の生契機といふより外ない——それが若し所謂意識內容的要素に全く還元し盡せるとすれば心理學は絕對の學でありうるわけであらう。尙意志についての仔細の事は

知から有への方向に沿うて實踐の事を考へる積りの後の章に別の機會を得たいと思ふ。而してその所謂意志の發動と共に（生の內的な瞳が新しい或るものに向ふ、向き直る、意味に於いて、嚴密には「直接繼時的に」）かの想像的內容の現實化、卽ちその輪廓的一般性の具體的個性化的限定があり、而もその場合、所謂想像や意志の體驗については、差當りそれらの直接意識態に於いてそれらとしての存在が十分に盡されてゐると考へられる限りに於いて、それらは明らかに非空間的であり所謂心的であるのに反し、この感覺的に現實化された內容については、それも亦やはりその單なる直接態に卽してのみ（從つて非空間的に心的として）見られることが强ち不可能ではないにせよ、實際には直ちにその直接的現前態の上に尙無數の可能的體驗を意味的に含みつつ、その事に卽しておのづからそれは一箇の空間的に物的なる或るもの（卽ちこの場合ペン先と左手の皮膚との接觸）であらうとするのである。

而して右の如くして成り立つた一箇の外界的な物的結果に對しては、やはり直ちにそれと時間的に接して——生の反省的一轉を介して——或る觸の感覺といふ現實的な性質的體驗の成立があるのであるが、その際その感覺的內容が一箇の心的結果（右の外界的結果を物的原因とする）として考へられるといふことは、畢竟やはりそれがその單なる直接的現前態に卽してのみ見られてゐるからであり又その限りに於いてであつて、若しその同じ感覺內容が、所謂受動感なるものに卽するその單獨性乃至孤立的遊離態から解かれ、寧ろ積極的な（目を閉ぢて觸覺に賴る場合の如き）知覺の一契機たる資格に於いて見られつつ、そこにその直接的現前態の上に尙無數の可能的體驗が意味的に含蓄せられる場合に於いては、それはもはや決して單に非空間的に心的な一狀態たるものではなくして却つてそれ自身明白に一箇の外界的物的事象（左手の皮膚の或る箇所に接觸した或る尖つた固い物）であるのである。——この間の事情は、

右の觸覺的現前內容の所謂刺戟的原因と考へられたところのかのペン先の接觸なるものが、差當り例へばそれの單なる視覺的現前態に卽してのみ見られてはそれ自身明らかに一つの心的狀態であり、のみならず一つの心的結果（觸覺的に物を目の前にかざすといふ、或は一層複雜に、その物に於いて反射する光線といふ、物的刺戟に因ると考へられるところの）でもあるにも拘らず、事實上直ちに無數の可能的體驗を意味的に含蓄することに於いて疑ひもなくそれが外界的に物的（な刺戟的原因）と考へられてゐた事情と、原理的に少しも異る所が無いのである。

云ひ換れば茲に或る觸の同一感覺內容が、一方その單獨の直接現前態に於いて見られては非空間的に所謂心的でありながら、他方無數の可能的體驗を意味的に含蓄するとしては却つて空間的に物的であるのであり、而もその空間的に物的な在り方に於いてはそれは結局、右の心的な在り方がそれに因つて結果したと考へられるところの外界的事象（皮膚にさはるペン先）そのものに――實はそれの具體的に現實化した或る一面に外ならぬものとして――歸着するものなのである。卽ち右の觸覺的內容は――それをばその物的な在り方に於いて先づ把握し、その同一物的事象の視覺的乃至觸覺的性質としての他の可能的一面に外ならぬものを現實的にそれに繼がしめる限りに於いて一度びはその意味的含蓄態に於いて自らの（心的直接態に對する）物的原因と考へられた同じ直接的內容を、この度びは却つて夫々一箇の心的結果たるものとして見ることが出來るのである。

かやうに考察し來つて我々の一先づ要約し得る所は次の如くである。一般に生の內容は、その直接の現前態に卽してのみ――云ひ換へれば、それが端的に「ある」がままに云はばその自體が直ちに露呈せられてゐる如きものとして――見られる限りに於いて、差當り一切がさうである如く非空間的に所謂心的であるが、若しそのやうな直接態がそ

の現前性に滿足することなく（「自體」が尙現前して居らぬとして）他の可能的體驗を限り無く指示する如きものである時、その事に卽して始めてそこに空間的に物的な或るものの存立があるのであり、從つて所謂心的なるものと物的なるものとの間の因果關係についても、それは畢竟生內容に關する右の如き直接的現前態とその意味的な間接態との間に於ける——而もその先後が何れになるにせよ生の反省的一轉を介して必ず繼時的であり、從つてその恒常性に於いて自然的に所謂因果關係の考へられることの決して無理からぬ如き——關係に外ならぬことが解るのである。卽ちその事を特に所謂刺戟の事態に關して云ふならば、それの眞相たる實は何らかの外界物が私の身體と或る空間的直接關係に於いて立つといふこと（それに續いてひとしく物的事象たる特定の所謂神經過程の生起があるといふこと）に關する或る意味的解釋的な生の一段階に對し、それと時間的に直ちに接して（反省的に連なつて）何らかの感覺的性質的內容に關する生の或る端的な直接態の存立があるといふことに歸着するのであつて、そこに所謂物心の間の關係なるものは實は生に於ける間接的と直接的といふ二樣態の間の反省的（但し恒常的）關係に外ならぬのである。

同じ事を尙別の面から云ふならば、所謂刺戟の事態例へば皮膚を突くペン先を物的原因として或る觸の感覺が心的に結果すると云ふ場合に於いて、その所謂物的原因は實を云へば決してそれ自體經驗に直接現前してゐるのでなく、經驗に眞に直接してゐるもの從つて或る觸の所謂心的結果に對して眞に存在的に直接先行してゐるものは、實はそれ自身すでに一つの「刺戟」的結果に外ならぬと考へられる何らかの視覺的乃至觸覺的な所謂心的內容であるに過ぎないのである。唯この心的內容は、そのやうな直接の現前態に卽しそれと反省的に關聯して無數の可能的內容を意味的に含蓄することによつて始めて所謂物的たるのであり、而もそこに意味せられる當のものとしての物そのものは、そ

れら直接現前的並びに可能的間接的な內容間の或る（行動を條件とする）時間的制約關係の窮極的統一として意味的志向の無限の可能性從つて眞にそれ自體としては永久に現前することのないものに外ならぬ。云ひ換へれば物そのものは逆說的ではあるが常に非存在的である（つまり意味的にのみある）のであり、それは所謂心界と「刺戟」の語に暗示せられる如き並立的に存在的な關係に於いて立つものでは決してない。生內容の心的な在り方と眞に存在的に接してゐるものはあくまでやはり心的な或るもの（或る場合例へば特定神經過程に關する生理學的觀察體驗の直接態といふ如きもの）以外のものではなく、差當りそのやうに心的非空間的にあるものの專ら時間的な繼起といふことが經驗の根本的實相である。唯その中に就いて比較的に安定的な要素としての所謂感覺的な性質的存在に關しては、その間の行動を介する恒常的時間的相關性に基いて、その或るものの差當り單獨な心的出現が通常單にそれだけに終ることなく、直ちに無數の可能的感覺を意味的に含みつつ——或る場合それは皮膚にさはるペン先であり他の場合種々の生理學的實驗裝置の下に見られる神經過程であるといふ風に——自體的には意味的指示の無限の課題たるものとして外界的に物的となるのに對して、そのやうな感覺的性質以外の例へば感情とか想像とか或は思考とか意志とかといふ如き生の諸契機に關しては、その直接の現前態が何ら行動的に他の可能的內容との恒常的相關性を實證されるといふ如きこと——從つてそれがその現前態に卽して何らか行動的に實現せらるべき可能的他面としての無限の意味的含蓄を擔ふといふ如きこと——がなく、その意味に於いてそれらはあくまで單に時間的に非空間的である外なく、元來原始經驗態たるものとしては物心乃至內外の差別以前でありながら、物的に空間的なるものの外界的に區別し出されるに應じて、それが所謂心的に內在的なるものとされるのであり、かの感覺的內容は之に對して一方その單獨的現前態

に卽して心的であると共に他方その意味的關係態に於いては物的である意味に於いて、所謂物界と心界との境たるものと考へられ、かくてこれらの生の諸內容が、一はその直接的現前態に於いて他はその解釋的な意味理解態に於いて見られつつ、その間に於ける生の反省的一轉に卽して互に繼時的に而も法則的に相關係する時、そこに所謂心界と物界との間の因果的交涉といふ考へが成り立つのであつて、實は生內容の直接態と間接態との間に於ける恒常的な反省的連結の關係に外ならぬのである。

而して所謂物界と心界との接觸の眞相にして右の如きものであるとするならば、その物界に就いてやがて物理學的に理解せられる如き數量的世界と現實の豐富な意識的性質的體驗の世界との間の一種の飛躍的關係に、全く理解を絕した罅隙といふべきものが感ぜられ、所謂「宇宙の謎」の隨一なるものがそこに指摘せられるといふことの當然さも亦おのづから理解せられると思はれるのであつて、何故と云ふにその所謂罅隙乃至飛躍たる一種の斷絕こそ、實は理解そのものがすでに形式的に自覺に於いて正にそれに據つて成り立つてゐるところの斷絕に外ならぬからである。

それならば、物心兩界の間のそれに比しては通常一層理解し易いと考へられてゐる單なる物界の因果關係は、仔細考へてにその眞相如何なるものであり、如何なる意味に於いて所謂理解し易いのであらうか、それを暫く右の事情と關聯せしめつつ次に考へてみようと思ふ。

說明を簡單にするため條件を理想化して次のやうな例を考へてみる。ここに一箇の球（甲）が靜止して居り、或る方向に沿ひ或る速度を以て動いて來た他の球（乙）がそれに衝突し、自らはそこに靜止すると共に、今まで靜止して

ゐた甲なる球は、新しく或る速度を以てその同じ方向に沿うて動いてゆく。この事柄を差當り「見る」ことに於いて私がそこに眞に直接經驗することは、一方に、靜止する甲に或る速さを以て近づき遂に接する乙といふ事象と、他方に、靜止する乙に接する位置から他の或る速さを以て遠ざかりゆく甲といふ事象との、差當り唯性質的に異るといふ外ない二種の視覺的體驗が、嚴密に云へば實は夫々の內で刻々異質的に段階を成しながら、所謂生の內的な瞳の一轉といふことに卽する直接的な時間關係に於いて、相接してゐるといふことに過ぎないのであり、その限りそこには上述の意味に於いて所謂心的な異質的事象の繼起（反省的連結）の關係の存するばかりであつて、その異質的に先後するものの間に於ける過渡そのものは、差當り全く理解を絕する一種の飛躍といふより外はないのである。その事は、その先後する視覺的性質的體驗中の先なるものが、その端的な直接相の上に無數の可能的な視覺的體驗を意味的に含むことに於いて先づ空間的に物的となり、而もその後なるものは、差當り唯その直接の現前態に止められたまま、右の空間的に物的な先行者を以て一種の所謂刺戟的原因とするところの一箇の心的結果として考へられる、といふ如き場合に於いても亦同樣であることは上述の通りである――とは云へこの場合そのやうにしてそこに一種の物心關係を見ようとすれば直ちに問題となつてくることは外でもなく、そこに物的に解釋された先行態たる「靜止する甲への運動する乙の接觸」は、「靜止する乙から離れ行く甲」に關するとしてそれに續く或る視覺的體驗の心的直接態に對しては、嚴密に云つて先きの例の「左手の皮膚へのペン先の接觸」といふ物的事象がそれに續く或る受動的な感覺に對してさうであつたと同じ意味に於いては、所謂刺戟的原因といふことができないといふことである。

それはどういふわけであるかといふと、今の場合に於いてはそこに心的結果と考へられるものが、先きの場合の觸

覺的であつたのと異つて視覺的であり、從つて又それに先行して私の身體に對し干渉的に所謂刺戟といふ外界的事態を構成すべき物的契機も、實は觸覺の場合に於けるペン先といふ如き可視的刺戟物のその可視性をも既に所謂刺戟的に成り立たしめてゐる筈である如きものとしての或る特殊の物理學的存在「光」であるのである。而してその光なるものは元來、或る特殊の性質的體驗たる視覺を基礎に種々の技巧的間接的樣式に於いてそれを——體驗の直接的異質性を貫き空間的連續を保つ或るものとして——效果的に檢出する物理學的實驗觀測としての、或る場合極めて高度に複合的な性質的時間的體驗群を意味的に指示することに卽して成り立つところの一箇の外界的實在であつて、その點形式的に他のあらゆる物的實在の存立と少しも事情の異る所はないのであるが、異るのは唯、例へば觸覺的に成り立つところの外界物が必ず身體に直接的として現はれるのに對し、視覺的に成り立つ外界物は却つて常に身體からの或る距離に於いて立ち、刺戟物としての光は從つて自らを通常その外界物の距離感、云ひ換へれば觸覺的に實現せらるべき或る意味としての遠隔性、の中に全く隱匿し了つてゐるといふ點である（この事は、觸覺的に窮極的な卽ち生命に最も切實な刺戟源泉の豫知といふ視覺のもつ生物學的意義と不可分のものであることは云ふまでもなく、「音」に關しても亦略同樣な事情が見られるのである）。而して「光」のこの意味に於ける自己隱匿性といふべきものから、例へば上述の場合のペン先の如き、觸覺に關する可視的な刺戟的原因について、恰もそれが物としてそれ自體——卽ち觸覺の「現象」に對する「實在」として——經驗に直接現前してゐるかの如き皮相感が生じ、その事はやがて一般に感覺的性質の背後乃至彼岸なるもの、云ひ換へれば性質的存在と意味的非存在的に斷絶しつつ連るものとしての物理學的實在について、恰もそれに本來的でもあるかの如く何らかの「形」の如き存在的規定が想像されて來ようとする一

種の根強い先入主となつてくるのであるが、云ふまでもなくかのペン先が眞に物そのものとしては、その直接の視覺的存在態の彼方に本來意味的間接的にのみ成り立つてゐるのである如く、總じて物的實在は嚴密に云つてその自體に於いては決して何らか所謂想像せられ得る如き具體性、云ひ換へれば經驗的直接性をもつてゐるものでなく、そのやうな具體性――卽ち物理學さへもが最近に至るまで所謂古典的にその殘滓を物の窮極態に關する所謂時空的模型の考へに於いて保つてゐたやうなそのやうな具體性――は、畢竟、物の眞の本質たる意味的關係の或る綜合、その可能性乃至「力」をば、差當り唯簡便に象徵するための、經驗からの一種の類推的記號といふべきものであるに過ぎないのである。云ひ換へれば、物的實在が恰もその自體に於いて何らか獨自の形といふ如きものを具へたものであるかの如く考へられ、そのやうな――元來經驗的由來をもつものとしての――存在的規定の意味に於ける「何たるか」がそれにつるいて問はれ限り、永久に所謂「現象」的被覆の取去られる心配のないその正體は、確かに「宇宙の謎」の一つでもなければならないわけであるが、實を云へば元來物的實在といふものは、その所謂「現象」的被覆たる何らかの性質的存在態の現實性並びに可能性に關する或る意味的關係的統合として以外には嘗てどこにもその存立をもつたことのないものであり、その意味に於いてそれ自體もともと非存在的に無形的なものなのであつて、所謂「現象」として經驗せられる所と異るそれの自體的な何らかの「形」從つて又かの所謂「力」とあくまでも區別される「物」といふ如き考へは、畢竟右に述べた如く、實は觸覺的刺戟的事態を別に視覺的に見てゐる場合の如き經驗からの單なる惰性的な想像的延長であるに過ぎないと考へられるのである。

さういふわけで、觸の感覺の出現については、それが直接の所謂心的な受動的單獨態を出て意味的關係的に解釋せ

られ所謂物化する時、それは既に私の身體の何れかの部分と空間的に直接する如き、從つてそれの刺戟的原因たる事態を直ちに明らかにしてゐる如き、何らかの物であるが、之に反して視覺的感覺の出現については、それがその單獨の受動的現前態に止ることは例へば眩燿的に異常な强度の場合の如きを除いて自然的に極めて、稀であつて通常は直ちに謂はば一種の强制を以て意味的に解釋せられつつ所謂外化するものなのであるが、そのやうな所謂知覺的な意味含蓄態に於いて成り立つところの（視覺的）空間的物的事象は、觸覺の場合の皮膚に相當する私の身體部分である眼底と決してそのまま空間的に直接してゐるといふことがなく、從つてその外界物はそれ自身として直ちに所謂刺戟物たることを得ず、却つて唯光といふ一種の空間的物的存在を始めて眞に所謂刺戟的に眼底に直接せしめるべく反射し散亂せしめてゐる意味に於いて（これらのやはりそれ自體決して經驗に直接現前することのない外界的事象も皆々意味的關係的にそれらの事柄を示すとしての或る性質的時間的體驗群に關する何らかの現實性並びに可能性に於いて成り立つてゐるのであることは云ふまでもない）謂はば間接的に刺戟的であるに過ぎないのである。

それであるから、現前の或る視覺的心的內容が一箇の外界的物的事象として意味的に解釋せられたものとしてのかの「甲球に觸れる乙球」は、「乙球から離れる甲球」に關するとしてそれに續く或る視覺的內容の心的直接態に對しては、嚴密に云つてそれと眞に直接的な關係に於いて立つてゐるのでなくして、實はこの後なる心的內容に對し一層直接的であるべき別の物的事象——卽ち、眼底との或る空間的直接關係に入る外界的存在「光」の或る配置といふもの——に關し右に所謂間接的刺戟的にそれを規定してゐるところの一箇の物的事象としての「乙球から離れる甲球」に對して始めて自身直接してゐると考へらるべきである意味に於いて、謂はば二重に間接的といふべき關係に於いて

立つてゐるのである。

かやうにして――少し長過ぎる迂廻であつたが――結局そこに、差當つての心的直接態に於いて繼起する二種の觸覺的體驗が夫々意味的に――「光」に關する右の如き仲介的事態をも暗に含んで――外化した所に成り立つものとして、の「甲球に來り接する乙球」と「乙球から離れてゆく甲球」といふ二つの物的事象の間の直接的な時間的連結が、今我々の主題たる所謂物的因果の一例として考へられるといふことになつてくるわけであるが、そこで先づ問題は、一體何故差當つての所謂心的な體驗內容はそのやうにして所謂外化乃至物化への傾向を辿らうとするといふべきなのであらうか。卽ち右に述べられた如く、そこに時間的に先行する一方の體驗內容がそれ自身先づ物化し、而も直ちにそれに續くと見える他方の體驗內容に關しては、先きの觸覺的刺戟の場合と單に形式的類比的に云ふ限り、それがその物的先行者を以て刺戟的原因とする一箇の心的結果としても見らるべきであると思はれるのに、實際上その事はなくして却つて直ちにそれ自身やはり物化し、先きの物的事象に對して眞に直接後續するものは實はこの物的事象であるとして、謂はば物があくまで物と關係しようとしてゐるかに見えるといふべきであるのは一體何故であらうか。而して又そのやうにして物が物とのみ關係する所に上述の意味に於ける絕對非合理的繼起關係は如何にその狀況を變へてくるものなのであらうか。

それについて先づ「甲球」と「乙球」といふものを取つて考へてみるのに、それらは例へばその視覺的な直接現前態に卽しては差當り唯異質的な二種の非空間的心的內容といふ外ないのであるが、それが更に、例へば種々の距離乃至角度からそれを見直すとか、或は種々の仕方に於いてそれに觸れてみるとかといふ如き事柄を意味する或る複雜な

性質的時間的體驗との法則的相關性に於いて見られ、やがてそれら法則的に相關的な體驗、內容の複雜な意味的含蓄に卽してそこに空間的物的に所謂球といふ形をもつ或る大いさといふ考へが成り立つに至れば、そこには同時に、例へば半徑といふ或る直線的な長さ（それを物尺で測るといふ體驗）に關して、或る共通的同一性の上に互に相異するといふ事態に於いて所謂量的比較といふことが成り立つのである。同樣に又それらを例へば「秤量」するといふ事柄を意味する或る複合的體驗がそこに意味的に含蓄されることに於いて所謂重さといふ考へが成り立てば、そこにはやはり例へば秤の目盛の上なる指針の運動を見るといふ如き體驗の或る共通的同一性を介して一種の量的比較といふことが成り立つ。更に又、「甲球に近づく乙球の運動」と「乙球から離れる甲球の運動」といふものを取つて考へてみるならば、それらは差當つてはやはり唯互に異質的といふより外ない二種の視覺的體驗であるけれども、やがてその意味含蓄的な外化乃至物化に卽しては、例へば時計の指針の或る運動と共に運動する距離の測定といふ如き一種の共通的體驗を介して所謂速度なるものに關する一種の量的比較の可能が成り立つ。かやうにして遂には、差當り唯異質的に飛躍的たる外なかつたかの繼起的二事象の間にも、兩球夫々の所謂質量と運動速度との相乘積といふ數量的等質態に關して互に全く同一的であるといふ如き顯著な事實が見出されてくることとなるのである。

右の簡單な例によつて解るやうに、總じて生の直接の心的內在的狀態が（正確に云へば物心乃至內外の差別以前であるが、やがて「物的」乃至「外的」として差別し出されるものに對して「心的」であり「內的」である）、所謂物化し外化するといふことは、畢竟その直接的異質態に卽して（反省的に關聯して）謂はばその背後乃至根柢に何らかの共通的同一性が見出され、そこに從來の單なる質的相異の絕對的斷層が所謂量的比較といふことに卽して相對化さ

れ一種の連續性を帶びてくるといふことを意味するのに外ならぬのである。而して抑、異質性の背後に同一性が見出されてくるといふことは、實は一般に相異性のもつ新奇乃至緊張の感に對して同一性のもつ慣熟乃至平安の意識の成り立つといふことに外ならぬのであり、そのやうな相異性と卽する同一性の意識といふものに於いて所謂自覺的連續意識の成り立つ所にこそ生の一種の知的悅樂態としてのかの合理性意識なるものの存立はあるのであつて、かくて畢竟心的なるものから物的なるものへの上述の一種の自然的傾向といふべきものは、實は既に別の見地よりして質の量化と見られ或は時間の空間化と見られたと原理的に全く同じい生本然の合理化的意欲に沿ふものであることが解るのである。

卽ち右の合理化の傾向は――例へば凡そ空間的位置といふものとか或は又凡そ外界的に實在的な何らかの物といふものとかが全く形式的一般的に考へられる所にも既にそれらの考へが（上の章に述べられた如く）やはり或る直接的異質的體驗（の法則的相關性）を通じて夫々運動感覺的に若しくは（それを豫想して）空間的位置的にといふ風に或る同一性乃至連續性の自覺されてくることに外ならぬのであつて――かやうに既に生の自然的根本的な外化乃至物化に卽して刻々その歩を進めてゐるものであり、而もその異質性の裡に求められる同一性といふものが結局やがて科學的に右に述べた例に於ける所謂運動量、或はそれが方向性を失うて一般に效果的に「仕事」をなしうる可能性といふ如き見地からは所謂運動エネルギー、更にそのやうな可能性に關して量的に互に歸同するものが所謂物の運動以外に尙熱とか光とか電磁氣といふ如き異質的事象としても見出されるといふことの事實的發見に卽しては一般に所謂エネルギー、といふ如きものの所謂「保存」性に於いて量的に眞の普遍性を獲得する所にはじめてその窮極の滿足を見出

すべきものであつて、所謂物的因果世界のもつかの合理感なるものはかくて畢竟右の如くして物理學的に示されてくるところのそれの量的自己保持に於いて普遍的な同一性の意識に沿うて成り立つ一種の連續（自我）感乃至安定感に外ならぬといふことができるのである。

そこでもう一度上の例に歸つて――「甲球に來り接する乙球」に關する視覺內容の差當り性質的に非空間的な所謂心的狀態であるものが、やがて意味的に一箇の外界的物的事象を現はすものとなる時、そのやうな意味的（非現前的間接的）存立者としての物的事象そのものは、それに關する右の視覺的心的現前內容の、それ自身種々に變樣し得る意味に於ける相異性にも拘らず――實を云へばそのやうな相異性を通じそれの意味的合蓄に於いてのみはじめて具體的に可能なる如く――同一的である。卽ち、その同一物的事象は例へば種々の距離や角度から、又種々の光の中で、見られ得るのである。

ところで今「乙球から離れゆく甲球」に關するとしてそれに續く他の一つの視覺內容に就いて、それを若しその直接の心的狀態にのみ止めて見るとするならば、この直接の性質的存在態とそれに先立つかの物的事象の意味的非存在態との間には、既に述べたやうに到底架橋し難い一種の罅隙が感ぜらるべきことは勿論として、單にそれだけに止まらず、尙その間の繼起の恒常性といふことさへも實は成り立ち難いといふ事情にあるのである。

それは何故であるかと云へば、そのやうな心的直接態はかの同一物的事象に續いて、それ自身種々に變樣し得るからであつて（卽ち「乙球から離れゆく甲球」といふ同一事象もやはり種々異つた事情の下に種々異つた外觀を呈し得

るのである)、その點にこそ實は右の繼起事象が、例へば上例の「皮膚に來り觸れるペン先」といふ視覺的物的事象に續く或る心的事象としての觸の感覺といふ如き場合と直ちに同一視せられ得ない理由も存するのである(「皮膚に觸れるペン先」と續く觸の感覺との間の繼起關係も實を云へば尙その相應が眞に嚴密といふことはできないのであつて、その事に關しては後に述べる)。

然るにそのやうな可變的動搖的な直接的心的內容が一たび意味的に同一物的事象「乙球から離れゆく甲球」を指示するに至れば、この物的事象とかの先行物的事象の夫々確定的な存立の間には、その繼起の相應的變樣關係の嚴密さが上述の如き(「運動量」といふ)數量的「保存」性の上に保證せられて居り、このやうな嚴密な函數的呼應の規定關係に於ける假言的(「かくすれば、或は、かくする限り、かくなる」といふ)法則性にこそ物界特に所謂物理學的世界なるものの特色は存するのであつて、又その點にこそ物の世界(就中所謂無機的なそれ)に對する生の一種の安易な確實感、云ひ換へれば「道具」視的輕蔑感をも含む一種の安堵感といふべきものの成り立つ所以もあるのであるが、併し乍ら物的乃至物理學的世界のそのやうな所謂合理性に關しては、その謂はば自足的な無量的連續性の反面に實は所謂心的生內容の極めて豐富な異質的存在態が暫く度外視せられてゐるのであるといふ明白な事實が見逃されてはならないのである。

元來物理法則の所謂精密な數學的形式といふものは、既に物理學としても決して單にそれだけのものでなく、例へば力學法則の所謂微分方程式の形に於ける或る函數的表示に就いて、若しその變數の或るものに或る特定の數値を入れることによつて他の變數の或る特定の數値を求めるといふだけの事ならば、云ふまでもなくそれは單に數學の事、

云ひ換へれば無時間的な論證の世界の事であつて、それがあくまで時間的な因果關係に關するとしての物理法則である限り、その直接の單なる數量態は實は必ず意味的に、或る性質的時間的體驗世界への指示であるのでなければならぬのである（物理量は具體的に測定手續の體驗を離れては成り立たぬ）。數學的に論證的な所謂必然的導來の世界に物理學の本質はあるのでなく、そのやうな數學的形式の或る場合極めて高度に間接的に意味する所たる異質的體驗間の實は決して嚴密に必然的ならぬ時間的關係の世界こそその本領であつて、物理法則がその當初の數學的遊離態を出て卽事物（現實）的に徹してゆけばゆく程遂には眞の時間性をその形式の上にまで反映して非必然化してゆく所以もそこにあり、異質性の背後に見出される同一性としての數量的共通態と卽する連續意識に於いて確かに一應合理的といふべきであるところのかの物的因果なるものは、實はその所謂合理性の因つて來る同一性といふものをば——例へば上述の甲球と乙球との間に於ける「重さ」といふものが、結局具體的には、夫々の球の現前といふ體驗と相應的に變樣する（從つてその時間的結合關係の恒常性に於いては結局それを代表する）としての秤量といふ或る共通的體驗にまで歸着するやうに——一般に體驗の相異的系列の間の時間的呼應關係に基く共通的代表性といふものに於いて得てゐるのであつて、その意味に於いてかの所謂合理感なるものは、實は時間的異質的世界を漸次代表的に（呼應的變化の關係の恒常性に基いて）間接化しつつ遠ざけて行つた極、遂にはそれを暫く見失ふことに於いて單に代表的記號に過ぎぬものたる數量的等質態に視界を全く奪はれた所に成り立つところの一種の自己欺瞞的幻影的感情に過ぎぬと云ふこともできるのである。云ひ換へればかの所謂合理感なるものは、それが所謂續く瞬間の必然的規定といふ如きものに卽して感ぜられるそれである限りに於いて、實は時間的非合理世界と無時間的合理世界との間の右に述べた如

き記號的代表關係といふものがそこに未だ十分具體的に自覺されて居らぬのであると云ふことができるのである。實を云へばかの數量的等質態の記號的代表性といふもの自身、結局異質的體驗間の時間的呼應關係の恒常性といふものに於いてその眞の具體的基礎をもつてゐるのであつて、從つて所謂合理的な物的因果なるものもその眞の構成質質といふべきものは結局異質的體驗間の時間的連結以外のものでなく、それが正に時間的連結である限りに於いて、それ自體過渡的に全く理解を絕する反省（「生起」乃至「次の瞬間」一般）の神秘を含んでゐることは、實は上述の所謂物心間の場合の如きと少しも異る所がないのである。異るのは唯、物心間の場合一方は必ず端的な直接態であつたのが、この場合に於いては兩方とも意味的な間接態に於いて見られ、從つてそこに數量的記號世界の連續性に卽して所謂合理性の成り立つといふことであるが、その所謂合理性たる實は、右の反省的非合理的連結に關する單なる恒常性——云ひ換へれば經驗的にその再認が重ねられた上の豫期的（情性的自己保持的乃至延長的）確信——といふもの以外にその眞の源泉を、從つて又その具體的な意味內容を、もつては居らぬのである。

從つてその意味に於いては、かの物心間の所謂因果關係なるものも、その時間的連結の關係の恒常的なる限り正當に因果的と云つてよい筈なわけであつて、唯この場合にあつてはかの反省的生起一般のもつ非合理的飛躍感が物的因果の場合の如く記號的等質態の連續性の背後に間接化せられるといふことがなく、却つてそのまま直接現前的であり、所謂「宇宙の謎」の隨一ともなされる底のその非合理感の深刻さは、畢竟物的因果の場合の右の間接性に對するこの直接性であるに過ぎないと考へられるのである。

右に述べた如く物理學的世界の數學的表現は、それが單なる無時間的論證の世界に終始するのでなく本來時間的な因果關係に關するのである限り、何らかの間接度に於いて必ず性質的時間的體驗の直接的世界にまでその意味的指示を屆かせてゐるのでなければならず、その意味に於いて物的因果世界の所謂合理的存立自體實は既に何らか所謂心的な生の非合理的直接態を含んでゐるのでなければならぬのである(感覺的性質の物心二面性)。

併し乍らその場合に於ける所謂心的直接態なるものは、眞の意味に於けるそれ(心的よりも寧ろ根本經驗的直接態)の具體相からは實は既に遠く離れたものであるに過ぎないのであつて、元來眞に具體的には生全體の背景の上にそれと不可分の反射的關係に於いて刻々個性的に相異的であるところの性質的內容が、その直接的相異性の中に就いての何らかの共通的な契機の見地から、爾餘の契機を以て差當りその非本質的外的變樣とする廣義の所謂種的な同一性に於いて自覺せられ(變化の中に自己を同一に保ち)、所謂强度的相異契機のみは尙そこに本來的として保持せられたまま、そのやうな既に豐富微妙な個性的陰翳の多くは外的として無視した限りの抽象的同一性に於いて、他の同樣な抽象的同一態との間の時間的相關に關する所謂反覆可能性乃至恒常性といふものの成り立ち得る所にのみ、はじめてかの物的因果世界の合理的(數量的)存立なるものはあるのである。

云ひ換へれば、數量的等質的に——連續の意識に卽して——所謂合理感を成り立たしめる物理學的記號世界が、その異質的な時間的(心的)體驗世界に對する記號的代表性といふものをば結局その直接的世界に於ける變化の時間的呼應關係の恒常性といふものに於いて得てゐることを上に述べたのであつたが、その呼應的變化の關係に於ける恒常性、云ひ換へれば反覆可能性といふことは、もともとそこにその變化の相關性に關して考慮せられる性質的內容がその豐

富な幾多の個別化的契機に關して暫く無視せられるといふことなしには成り立ち難いのである。

而してその場合その所謂個別化的契機の無視といふことが實際どの程度に行はれ、同一性が從つてどの程度の抽象性に於いて滿たされるかといふことの標準は、結局夫々の場合そこに働いてゐる行動的に目的追及的な意欲の立場がそれを規定すると考へられ、行動に關する見通しといふ理解知本來の立場から云つてその事は當然であつて（行動的意欲の立場が何故認識に關する抽象性を招來するかと云へば、それはその立場が生內容の單なる現前相――それの直接の感受――によりも寧ろ所謂理解的にそれの意味的に約束する所に關心をもち、而も意味的に指示せられるものとしての生の想像態はその現實態よりも當然その內容が一般的であり形式的である――その事は想像が本來現實的印象の再認乃至（注意的）確認を條件とするとしてのそれの惰性的本性といふものから當然由來する事柄である――からである）、その意味に於いて知の謂はば實用的な一方面をなすところの理解知に於いて成る物理學世界が、非實用的に感受的な知の他の一方面に於いては十分意味をもつところの個性的陰翳的契機を當然右の如く無視してゆくといふ所に、爭ふべからざるそれの抽象性云ひ換へれば畢竟歷史性に對する理論性、若しくは物の現實性（斷言性）に對する學の想像的遊離性（假言性）、といふものが成り立つてゐるのである（その本來の抽象性の自覺が現實に深く徹した物理學知に於いて遂にその形式の上にまで反映せざるを得なくなつた所にかの所謂量子力學的新事態なるものも成り立つてゐるのであると考へられる）。

而して所謂歷史的に個性的な窮極の直接的異質的世界と、そのやうな異質性が單に種的な抽象性に於いてみられ而もそれが意味的に間接化した所に成り立つところの數量的物理學的世界との間には、實は所謂物的と心的とを以て相

反する二方向とする過渡の段階といふべきものが(幾重にも)考へられるのであつて、それはいかなるものであるかと云ふに、例へば、物理學世界が右の如く心的異質態を高度に間接化した所に成り立ち、唯さへ所謂反覆可能的な抽象性に於いてのみ顧みられるに過ぎない異質性がそこに動々もすればその遙かな意味的關係の彼方に見失はれようともし勝ちであるのに對して、その異質性をともかくも異質性として明確に把持しつつ、而も物理學がそれに於いてするよりも確かに豐富な具體性に於いてではあるが併しやはりその間に何らか反覆可能的な相關性の成り立ち得る程度の抽象性に於いてのみそれを顧み乍ら、所謂合理化の根本的意圖に沿うて何らかの法則的同一性をそこに見出さうとする時、そこに先づ差當り所謂感覺心理學といふ如き立場が成り立つと考へられるのである。

例へば現前の或る色、或る音、或る香、或る味、或る手觸り、或る手應へ、或る溫かさ、或る冷たさ、といふ如き諸性質は、夫々その現前性と行動的に實現し得べく必ず伴うて居る諸體驗特に科學的實驗觀測としてのそれを意味的に含むことに於いて、例へば或る特定の振動數をもつ電磁氣乃至空氣の波動であり、或る化學的藥品であり、或る流動體であり、或る錘の重さであり、或る熱、云ひ換へれば或る平均速度に於ける物質の分子運動、であるといふ風に夫々外界的な物的實在となる(或はそれを現はす)が、そのやうな外界的實在化に於いてもともと體驗の時間的相關の恒常性に基きつつ意味的にそのやうな外的實在を成り立たしめる基礎となつたところの現前的性質は、一旦その外的實在が特に所謂科學的測定といふ如き體驗を含んで數量的に確定するに至れば、今度は却つてそこから反射的にその確定性に應ずる如き恒常性を要求せられ、而もそのやうな恒常性は——例へば卑近な例で云つて或る灰色が外的實在的に同一と考へらるべきにも拘らずそれが赤を背景とすると青を背景とするとではその色合を異にし、同じ湯の中

に差入れた兩手が（かねて冷水中にあつた）一方の溫かさを感じるにも拘らず（一層高溫の湯の中にあつた）他方は冷たさを感じるといふ風に――性質的現前態の具體的に顧慮を深めらるれば深められる程、益〻得られ難いといふ事情にあり、この事がかの外的實在との間の意味的關係の間接性といふものの上に働いて、結局性質的存在（現前）性そのものが――單に抽象的恒常性を右の如く食み出す限りの性質的契機に止ることなく――擧げて外的實在の數量的な意味的存立態から切り離され、外的實在の客觀性に對してそれが所謂主觀的な內在的「現象」として見られるに至り、そこにかの「刺戟」の考へと共に身體特に神經系統といふ物的な說明基礎が考へられてくることとなるのであつて、殊に所謂神經の特殊エネルギーといふ如き考へに於ける外的實在界と內的現象界との間の全き存在的種別性の考へもおのづからそこに成り立つて來るわけである。

併し乍ら、實を云へばその所謂神經を始めとしてあらゆる外界的物的實在が、右の所謂心的な性質的現前態に對しては、元來それの或る意味的聯關に外ならないものとして、それとの間にたとひ性質的存在性と意味的非存在性といふ顯著な斷絕乃至對立を含むにせよ、全く不可分の關係に立つて居り、後者を離れて抑〻前者の具體的存立はあり得ないのであつて、從つて所謂「刺戟」の事態に就いても、そこに互に空間的に外的な並立關係に於いて立つものは、あくまでも唯所謂外物と身體としての物と物とのみに限られ、それらの物が現に夫々經驗的に物として成り立つ所にも既に豫想せられてゐる如き何らかの性質的心的現前態と所謂物の自體としての意味的間接態との間の關係は之に反しもはや決して「刺戟」といふ如き橫の並立的空間的關係ではあり得ずして、却つて唯生の直接態と間接態（その意味に解する限りに於いて「內」と「外」）といふ謂はば奧行的な――それも勿論非空間的な（何故ならば空間性は生の意

味的間接態に於いてのみ成り立ち、それと非空間的直接態との間の關係はもはや空間的であることはできない）――次元的階層の關係であつて、その間を繋ぐものも從つてもはや空間的に機械的な働きかけなどではなくして畢竟唯所謂反省的連結の關係であるに過ぎないのである。

而も、事情右の如くであるにも拘らず、その間にやはり何らか空間的な並立關係の如きものが考へられようとするのは何故であるかと云ふに、それは畢竟、既に述べた如く、心的狀態を――特に感覺的內容に關し――規定するに先づ身體の物的狀態を規定すべきであるといふ變化の條件的先行者としての身體の位置に準じて所謂心の空間的位置といふものまでを考へようとする一種の自然的傾向に基くのであつて、かやうに身體と外物との關係がそのまま暗に心と外物との關係にまで移されようとする所に、かの刺戟的外物をば自體的に何らか獨自の存在的規定をもつものであるかの如くに考へようとする他の自然的傾向もおのづから恰好の地盤を得、そこに外界的な物的實在界と內在的心的な現象的世界との間に特に誇張された意味に於ける質的斷絕（存在的種別性）の感ぜられようとする傾向をも生ずるわけであるが、それが一種の偏見であることに關しては既に上にも詳しく述ぶる所があつたのである。（未完）